

# 明治20年代までにおける〈する・なる〉の尊敬表現形式

—「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」系を中心に—

山 田 里 奈

## 1. はじめに

明治期（明治開花期から20年代までをさす）に一般的に用いられた尊敬表現形式は、「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」である（ただし、明治10年代後半以降「お～になる」の使用が増加する）。これらは、江戸後期から一般的に用いられた尊敬表現形式であるが、それぞれの使用実態と相互の関係について詳しく述べた研究は管見の限り見られない。江戸後期の使用実態については、別稿「江戸後期における尊敬表現形式—「お～なさる」「～なさる」「お～だ」を中心に—」（印刷中b）において考察を進めている。本稿は、それに引き続き、明治期における「お～なさる」、「～なさる」、「お～だ」の使用実態について明らかにすることを目的としている。

## 2. 先行研究

まず、本稿の対象とする、対称用法、かつ、命令形以外で用いる3表現形式について確認する。

【「お～なさる」】これは、江戸後期から明治20年代まで一般的に使用され、次第に「お～になる」と交替していく（辻村敏樹（1951）、山田巖（1959）、原口裕（1974）、山田里奈（印刷中a））。表す敬意は、「ます」を下接する場合、高い敬意を表し、「ます」を下接しない場合、主として対等の間関係以上で用いられる（山崎久之（1966）、小島俊夫（1974））。

【「～なさる」】この表現形式の江戸後期の使用について、従来、「お」を冠さない分、「お～あそばす」「お～なさる」と「お～だ」の間の敬意を表すと説明されている（辻村（1968）、小松寿雄（1971）、山崎（1966）、小島（1974）等）。しかし、量的な観点から見ると、「～なさる」は男性に偏って用いられ、女性にはほとんど用いられないこと、性別により「～なさる」と「お～だ」の使用に偏りが見られることがわかっている（山田（印刷中b））。

【「お～だ」】これは、江戸後期の使用について、親愛表現であること（辻村（1968）、湯沢幸吉郎（1954・1957）、小島（1974））、女性の使用に偏ること（辻村（1968）、湯沢（1954・1957）、小島（1974））、ただし、男性の使用も遊廓などでは見られること（小松寿雄（2005））、活用形や用法によって表す敬意の範囲が異なること（小松（2005））などが指摘されている。そして、明治期になると、連用形「お～だっ（た）」<sup>(1)</sup>の使用が見られることから、この形式が衰退するわけではないこと（小松（2005））、「お～です」が台頭し、交替していくことも指摘されている。

以上、先行研究について見てきたが、江戸語に関する研究が多く、明治期の詳しい使用実態につい

ては不明な点が多い。そこで本稿では、明治期におけるこれらについて、用例数の分布を取り入れた表（以下、「体系表」と呼ぶ）を作成し、具体的な使用実態について明らかにしていきたい。

### 3. 方法

以下、考察の方法について述べる。なお、調査対象資料は、明治開花期から明治20年代までの資料を扱う。各資料の詳細は最後の頁にまとめている。各資料に付した下線部を省略形とし用例には下線部のみを記す。

#### 3.1 体系表作成にあたって

考察は、明治期に見られる尊敬表現形式全体（対称用法、命令形以外）をとらえるために、体系表を作成して行う。体系表の縦軸となる上下関係は、山田（2012）に示したように、基本的には、社会的身分によってA〈下→上〉の関係、C〈上→下〉の関係（主従関係、身分差）、B〈対等〉の関係（身分差なし）に3分類する（用例にはA、B、Cと記す）。なお、親疎関係によって、単なる上下関係では判断できない例は、適宜説明を加えることとする。体系表中、B〈対等〉の関係以上で用いる表現を高い敬意を表す尊敬表現であると認める。体系表は、階層ごとに作成する。階層は、中流以上の人々、下層の人々、芸妓（遣手、禿も含む）に分ける。表中の「お～なさる～ます」と示す例は、助詞「て」を介して「ます」を伴った尊敬語が下接する例（例1）、「お～なさる～くださる」と示す例は、「てくださる」を下接する例（例2）を指す。

（例1）お助けなさつて下さいまし<sup>(2)</sup>。（芸妓お清→中流男性伊藤たち）【A】〔『浅』345〕〈M28〉

（例2）お泊りなすつて下さい。（中流男性宇之助→中流男性伝吉）【B】〔『鹽』88〕〈M18〉

「お～なさいます」「お～なさる～ます」「お～なさる～くださる」「お～なさる」などをまとめて指すとき、「お～なさる」系と呼ぶ。他の表現についても同様である。

#### 3.2 動詞の内訳

本稿の対象とする尊敬表現形式には様々な動詞が接続している。その内訳を確認しておこう。まとめると、次頁の【表1】のようになる。

【表1】から、すべての尊敬表現形式において、漢語サ変動詞の全体に占める割合が明治10年代よりも明治20年代の方が高くなっていることがわかる<sup>(3)</sup>。なお、表中の「お～なさる」には、「お～なはる」が9例、「お～なすつて（た）」が79例（促音形の全90例中79例）、「～なさる」には「～なはる」が1例を含んでいる（「～なすつて（た）」は0例）。

### 4. 明治期における「お～なさる」, 「～なさる」, 「お～だ」系の使用実態

上記で述べた基準に従って作成した体系表が次頁以降の【表2, 3, 4】である。以下、この表を参考に、明治10年代まで（表中では「前」）と20年代まで（表中では「後」）の違いに留意しながら考

表1 動詞の内訳

内 訳	明治10年代まで										合 計	
	漢語サ変動詞		おいで・ごらん		くれる		その他		しなざる			
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
お～あそばす系	2	6%	6	18%	0	0%	25	76%	—	—	33	100%
お～になる系	7	10%	16	23%	0	0%	47	67%	—	—	70	100%
お～なさる系	19	8%	30	13%	4	2%	176	77%	—	—	229	100%
～なさる系	2	9%	—	—	0	0%	18	82%	2	9%	22	100%
お～だ系	6	8%	19	26%	0	0%	49	66%	—	—	74	100%
合計	36	8%	71	17%	4	1%	315	74%	2	0.4%	428	100%

内 訳	明治20年代まで										合 計	
	漢語サ変動詞		おいで・ごらん		くれる		その他		しなざる			
	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%	用例数	%
お～あそばす系	4	15%	6	22%	0	0%	17	63%	—	—	27	100%
お～になる系	17	27%	11	18%	0	0%	34	55%	—	—	62	100%
お～なさる系	18	12%	33	22%	0	0%	100	66%	—	—	151	100%
～なさる系	4	36%	—	—	0	0%	6	55%	1	9%	11	100%
お～だ系	10	12%	15	18%	6	7%	52	63%	—	—	83	100%
合計	53	16%	65	19%	6	2%	209	63%	1	0.2%	334	100%

表2 中流以上の人々の使用

上下関係	A				B				C				合計	
	男性		女性		男性		女性		男性		女性			
	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
話し手の性別	男性		女性		男性		女性		男性		女性			
聞き手の性別	男性		女性		男性		女性		男性		女性			
表現形式\時代区分	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後
a	お～あそばします		お～あそばす		～あそばす		お～なさいます		お～なさる～くださる		お～なさる～ます		お～なさる	
b	お～になります		お～になります		お～になります		お～になります		お～になります		お～になります		お～になります	
c	お～になります		お～になります		お～になります		お～になります		お～になります		お～になります		お～になります	
d	お～でございます		お～です		お～だ		お～だ		お～だ		お～だ		お～だ	
e	お～だ		お～だ		お～だ		お～だ		お～だ		お～だ		お～だ	
f	お～られる～ます		お～られる		お～られる		お～られる		お～られる		お～られる		お～られる	
合計	38	7	22	1	27	15	12	3	71	30	30	34	70	127

表3 下層の人々の使用

	上下関係		A				B				C				合計												
	話し手の性別		男性		女性		男性		女性		男性		女性														
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性													
	開き手の性別		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後											
	表現形式\時代区分		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後											
a	お~あそばします				1	2	1									1	2										
	お~あそばす~くださる															1	0										
b	お~あそばす		2	1	1	4	2									6	4										
	お~なさいます			1	1	1	3									5	1										
	お~なさる~くださる		1		1											2	0										
	お~なさる~ます		3	1	3	1										7	1										
c	お~なさる		11	7	11	7	2	3		2	1	1	1			34	12										
	お~になります		1		4	6										5	6										
d	お~になる		2	1	1	3										4	3										
	~なさいます					1										0	1										
e	~なさる			1	1	1		1	2	3	1	1				9	2										
	お~でございます		1		2	1	4									7	1										
f	お~です				1	1			1							2	1										
	お~だ	お~だら				1										1	0										
		お~で(ない)										2				2	0										
		お~だっ											1			1	0										
		お~か			1						1					2	0										
		お~だ				2			1	1	1	4				1	9	1									
		お~なら・なれ				1											1	0									
れる・られる		2		1				1							4	0											
合計		23	0	13	0	32	28	12	3	3	0	6	1	4	3	8	0	1	0	0	0	0	0	1	0	103	35

表4 芸妓の使用

	上下関係		A				B				C				合計		
	話し手の性別		女性		女性		女性		女性		女性		女性				
	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性			
	開き手の性別		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
	表現形式\時代区分		前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	前	後	
a	お~あそばす		2		1											3	0
	お~なさいます		1		1											2	0
b	お~なさる~くださる		2													2	0
	お~なさる~ます		3		1											4	0
c	お~なさる		34		3				1	1	1					39	1
	お~になります										1					1	0
d	お~になる		3													3	0
	~なさる		1	1												1	1
e	お~です		1		1											2	0
	お~だ	お~だら		1												1	0
		お~で(ない)			3											0	3
		お~だっ										2				2	0
		お~か			1	1						3				4	1
		お~だ		1	3	2				1	2					5	4
		お~な								1						0	1
お~なら・なれ		3	1	1				2						4	3		
f	れる・られる		3												3	0	
	合計		55	9	11	0	1	5	9	0	0	0	0	0	0	76	14

\* A ((下→上)の関係), B ((対等)の関係), C ((上→下)の関係)

察を行う<sup>(4)</sup>。各表から、「a お～あそばす」系、「b お～なさる」系、「c お～になる」系が主としてB〈対等〉の関係以上で用いられており、高い敬意を表す尊敬表現形式であることがわかる。そして、「b お～なさる」系のうち「ます」を下接しない「お～なさる」、「d～なさる」系のうち、「～なさる」、「e お～だ」系のうち「お～です」「お～だ」がBに偏って使用され、似た分布を示していることがわかる<sup>(5)</sup>。本稿では、これらのBに偏って使用される尊敬表現形式について考察を行う。

#### 4.1 「お～なさる」

以下、「お～なさる」について、上下関係ごとに見ていく。

##### 4.1.1 A〈下→上〉の関係における「お～なさる」の使用

まず、A〈下→上〉の関係（以下、単にAとだけ記す。B、Cも同様）の使用から見ていこう。本調査では、【表2, 3, 4】にAの使用が見られた。以下の例3は手代から客の弥次郎と北八に対して、例4は乳母から主人の阿輝に対して、例5は芸妓の田の次から客の吉住に対して用いた例である。

（例3）あなた方無理ない戯をなすツちやアいけません、御両所ながら片足ツツはき違つて居ります、尊公のは右の足へはまる沓ばかり、尊公のは左りの方へはまる沓ばかり両方が片足ツツ御取替なされば宜しう御座ります。（手代→下層男性・客弥次郎，北八）【A】[『西』十四編上126]〈M3〉

（例4）御眼に御毒ですよ、御泣きなさつては。（下層女性乳母→中流女性阿輝）【A】[『空』第八回110]〈M21〉

（例5）アラ又。あんな口の悪いことを。お言ひなさるよ。（芸妓田の次→中流男性・客吉住）【A】[『当』第一回61]〈M18〉

例3は、買った靴のサイズが合わないと文句を言う客に対して、使い方が違っていることを丁寧な言葉遣いで説明している。例4は、主従関係における普段の発話、例5は、くだけた場面で用いた例である。従って、従来の、当期に一般的に用いられ高い敬意を表す尊敬表現形式であるという説明と一致している。

##### 4.1.2 B〈対等〉の関係における「お～なさる」の使用

Bの使用について見ると、【表2, 3, 4】から各階層に共通してBで用いられていることがわかる。階層ごとに見ていこう。以下の例6, 7は中流以上の人々の例である。

（例6）いゝエ、何も御氣にお掛けななさることは御坐いませんが、國野さん、昨晩は古いお馴染に御逢ひなされて、嘸御愉快でしたらふ。ヲホ、、、。（中流女性お春→中流男性国野）【B】[『雪』下篇第七回156]〈M19〉

（例7）三四年過す内には私も何とかして一身の方向を立てる積りでもあり、其時までには貴女の御尋ねななさる、人の消息がなくて、愈よ御互の心が合ふならば、〈中略〉同居をしても宜しいぢや御坐いませんか。（中流男性国野→中流女性お春）【B】[『雪』下篇第七回158]〈M19〉

この例のお春は元女教師のインテリな女性、国野は国士であり、ともに教養のある人物である。互いに「お～なさる」を用いていることから、中流以上の人々が互いに丁寧な言葉遣いで話すときに一

一般的に用いられた表現形式と考えられる。同様に、下層の人々や芸妓の使用でも丁寧な言葉遣いで話すときに用いられている。次の例8は、伯父の源作から芸妓の田の次に対して用いた例である。

(例8) およしさん。モウお忘れなすツたらうネ。(下層・田の次の伯父、大工の源作→芸妓田の次)

【B】[『当』第十八回の下151]〈M18〉

例8の源作に応答する芸妓の田の次も次の例9のように「お～なさる」を用いている。

(例9) 不思議な事だとおいひなさるのは、マアどのやうな事ですエ。(芸妓田の次→下層・田の次の伯父源作) 【B】[『当』第十八回152]〈M18〉

例8, 9の2人は、再会した場面で丁寧な言葉遣いで話している。一方、下層の人々の普段の会話では、「～なさる」や「お～だ」が用いられている。次の例10, 11を見てみよう。

(例10) 性来疳癪持ちでみなさるから。ウヌ。片意地な事をいふとか。(下層女性・姉お春→下層女性・妹お辻) 【B】[『妹』第十二回48]〈M19〉

(例11) 今更其小言はどの口でおいひだ。(下層女性・姉お春→下層女性・妹お辻) 【B】[『妹』第十七回246]〈M19〉

例10, 11は姉から妹に対して普段の会話で用いた例である。前掲例8, 9のように下層の人々がBで「お～なさる」を用いる例は少なく(【表3】中5例)、丁寧な言葉遣いで話すときに偏ることから、下層の人々が「お～なさる」を用いるときは、中流以上の人々や芸妓の使用よりも意識的に用いているといえよう。

従って、「お～なさる」は各階層に共通して、B以上で使用され、丁寧な言葉遣いで話すときに用いられる。なお、明治10年代後半以降、「お～になる」も台頭してきて「お～なさる」と併用するようになるが<sup>(6)</sup>、【表2, 3, 4】からわかるように、「お～なさる」の勢力には及んでいない。

#### 4.2 「～なさいます」「～なさる」

次に「～なさる」について見ていくが、先に【表3】下層の人々の使用に「～なさいます」(『浅瀬の波』〈M28〉)が1例のみ見られるため、この例を確認しておこう。

(例12) 虚言だと思ひなさいますなら、二階にお行でなすつて、見て下さいまし。(茶屋の女中お花→中流男性三吉) 【A】[『波』320]〈M28〉

この例12の話し手である茶屋の女中お花は、中流男性の三吉に対して点線部「お～なさる」も用いている。嘘をついているのではないかと問い詰める客に対して丁寧な言葉遣いで話しているのである。江戸後期では町人による「～なさいます」の例は見られなかった。1例しか見られないというのはこの傾向を引き継いでいるといえるだろう。しかし、丁寧な言葉遣いで話すときに「～なさいます」が用いられている点は注目される。以下、これも踏まえて、「～なさる」について考察していく。なお、「～なさる」について、体系表を確認すると、【表2】中流以上の人々はAからCまでの広い範囲で、【表3】下層の人々はB以上で、【表4】芸妓はAで用いている。以下、上下関係ごとに見ていこう。

#### 4.2.1 A〈下→上〉の関係における「～なさる」の使用

まず、Aの使用についてである。江戸後期の使用では、中流以上の人々の使用は、聞き手を非難する気持ちを含む場合と軽い敬意を表す場合に用いられていた。しかし、明治期の例では、聞き手を非難する気持ちを含む例は見られなかった。先に、軽い敬意を表す例を挙げてみよう。

(例13) 姉さん何所へ<sup>ゆき</sup>行なさる。(車夫団八→中流女性お清) 【A】 [『浅』330] 〈M15〉

(例14) 柵屋さんが極りて否味な振りを仕なはるわへなア。(下女お初→中流男性寅吉) 【A】 [『雨』第八回329] 〈M9〉

上記の例のように軽い敬意を表す例は、下層の人々の使用にのみ見られた。例13は、車夫が絡んでいるとき、例14は、下女のお初が主人のお岩に言い寄るお寅をからかうときに用いている。これらの例は、軽い敬意を表しており、江戸後期の使用を引き継いでいる。しかし、次の例15の宿のかみさんから客に対して用いる例は、軽い敬意ではなく、むしろ高い敬意を表している。

(例15) 平日から堅固<sup>ものがた</sup>く婦人の事を仰<sup>おつ</sup>しやらぬ旦那様<sup>あのか</sup>が今日に限り彼婦<sup>あいつ</sup>の面を熟<sup>ほれべ</sup>と見て惚々<sup>ほれべ</sup>なされた御容子ハ変つた事だと思ひましたが〈中略〉(宿のかみさん→中流男性・客静馬) 【A】 [『巷』第五回107] 〈M12〉

この例15は、宿のかみさんから中流以上の客である静馬に対して用いた例である。点線部「おっしゃる」や「旦那様」等とともに用いられていることから、高い敬意を表しているといえる。

現代語の研究であるが、菊地康人(1994)や小松英雄(1999)が「お～になる」が語頭に「お」をもつ動詞には接続しにくいことを述べている。当期の「お～になる」の使用拡大により「お」を冠しにくい動詞には、「～なさる」が使われるようになったのではないかと考えられる。例15の「惚々する」も同じ理由によって「～なさる」が使われたのだろう。同じように芸妓の使用に「おっかけなはる」も見られた。そして、明治28年にAで用いる「～なさいます」(前掲例12)が見られたのもこのような使用と関係しているのではないかと考えられるが、さらに用例を増やして考えていく必要があるだろう。

#### 4.2.2 B〈対等〉の関係における「～なさる」の使用

次にBの使用についてである。江戸後期、中流以上の人々の使用では男性の使用に偏る傾向があることと軽い敬意を表すこと、下層の人々の使用では女性が互いに用いることがわかっている。明治期の使用では、明治10年代と20年代によって様相が異なるため、わけて見ていく。

まず、明治10年代の用例を挙げよう。次の例16は、中流男性の通次郎から下層男性の北八に対して用いた例である。2人は弥次郎を加えた3人で、道中、騒ぎを起こすことから、Bと判断している。

(例16) よはい音をだしなさるネモシそんな事を言つたつても〈中略〉毎晩女の方から夜這に来て名代はとりきれやせんぜ。(中流男性通次郎→下層男性北八) 【B】 [『西』二編下311]

次に、明治20年代までの例17、18を見てみよう。

(例17) 何故貴君<sup>あなた</sup>今夜に限つて遠慮<sup>えんりょ</sup>なさるの。(中流女性お勢→中流男性文三) 【B】 [『雲』第三回110] 〈M20〉

(例18) 実験なさった事も少ないでせうが、さういふものをおかきになるとは、実に敬服のいたりです。(中流男性今宮→中流男性房雄)【B】[『五』249]〈M29〉

例17は女学生のお勢, 例18は小説家の今宮が用いた例である。若い女性の使用が見られることと、どちらの例も「漢語サ変動詞+～なさる」の用例であることが10年代までとは異なっている。また、江戸後期や明治10年代に見られたような、くだけた場面への偏りや男性の使用への偏りは見られない。これらの例とともに、漢語サ変動詞以外の例においても、親しい間柄にある女性から男性に対して「～なさる」を用いる例が見られるようになる(例19)。

(例19) なぜあんなにつれなくなさったの……。 (中流女性糸子→中流男性今宮)【B】[『五』264]〈M29〉

一方下層の人々は、明治10年代も20年代も軽い敬意を表すときに用いている。

(例20) 先月貸た一歩の金を一償で返すと言ひなさるから貸て進てから廿日も立つ間に娘ツ子が附木を賣つた銭で漸々三百這入た位の事じやア利足にも追付ねへ。(下層女性お欲→下層男性正庵)

【B】[『雨』第一回311]〈M9〉

(例21) なる程お前の言ひなさる所は至極道理なお咄しだがお見掛通り夫婦ながら枕を並べて寐て居ませバ。(下層男性正庵→下層女性お欲)【B】[『雨』第一回311]〈M9〉

例20, 21は、以前は医者であったが自分の病気のために裏借家住まいを強いられている正庵と正庵から金を取りたてているお欲が互いに用いた例である。

#### 4.2.3 C〈上→下〉の関係における「お～なさる」の使用

最後にCの使用について見ていく。Cの使用では、明治10年代, 20年代ともに、軽い敬意を表す例が見られる。次の例22は、中流男性の山田文治が下層女性に対してお雪という人物の居所を尋ねる場面で用いている。

(例22) 私は市ヶ谷の山田文治といふ者だが、お雪さんは居なさるかエ。(中流男性山田文治→下層女性)【C】[『緑』第十七回314]〈M21〉

例22は、裏通りに住む見知らぬ人に対して話しかけている例であることから、初対面の聞き手に対して軽い敬意を含んだ表現として用いていることがわかる。

### 4.3 「お～だ」系

最後に、「お～だ」系であるが、「お～です」と「お～だ」を分けて考察していこう。

#### 4.3.1 「お～です」

まず、「お～です」について、【表2, 3, 4】から、中流以上の人々は主としてBで用いること、下層の人々と芸妓の使用はB以上で用いることがわかる。以下、上下関係ごとに見ていこう。

##### ○ A〈下→上〉の関係における「お～です」の使用

Aの使用は、すべての階層にその使用が見られる。次の例23は、宿の女中から客である国野に対して用いた例である。



(例23) イ、エ木賀へ<sup>おのほ</sup>御上りになりましたが、何だか旦那に御用がある御様子で御座いましたから、度々私しが爰へ参つて見ましたが、餘り能く<sup>おまつ</sup>御寝てお出でしたから御起し申しませんでした。(下層・宿の女中→中流男性・客の国野) 【A】 [『雪』下篇第一回 137] 〈M19〉

この女中は、国野の連れであると勘違いした人物に対して二重傍線部「おのぼりになる」を用い、国野に対しては〈寝る〉の尊敬語「およる」を用いていることから、客に対して高い敬意を表そうとしていることがわかる。従って、「お～です」も高い敬意を表している。同様に中流以上の人々や芸妓の使用にも高い敬意を表す例が見られる。また、芸妓の使用には客だけでなく、抱えの主人に対して用いる例も見られる。

(例24) アノ阿母さん私が<sup>おつか</sup>出抜に<sup>わちき</sup>斯して<sup>だしぬけ</sup>来たは<sup>かう</sup>不審をも<sup>き</sup>亦厚か<sup>ふしん</sup>ま皮とも<sup>またあつ</sup>お思ひで<sup>しい</sup>せうが<sup>おも</sup>是には<sup>これ</sup>種々<sup>いろへわけ</sup>訳もあれば〈下略〉(芸妓千代吉→中流男性・抱えの主人お寅) 【A】 [『沢』509] 〈M13〉

いずれの例も高い敬意を表しているといえるだろう。

#### ○ B〈対等〉の関係における「お～です」の使用

次にBの使用について見ていこう。以下の例25, 26は、中流男性の国野と中流女性お春が用いた例であり、前掲例6, 7と同じ人間関係である。

(例25) 國野さん、能くマア早く<sup>お帰り</sup>御帰りでしたなア。(中流女性お春→中流男性国野) 【B】 [『雪』下篇第七回 153] 〈M19〉

(例26) 貴女は如何して此の<sup>お写真</sup>写真を御所持ですか。(中流男性国野→中流女性お春) 【B】 [『雪』下篇第八回 120] 〈M19〉

また、次の例27のように書生同士で用いる例も見られる。

(例27) ヤ継原君。いまお<sup>かへり</sup>帰校ですか。(書生桐山→書生継原) 【B】 [『当』第九回 85] 〈M18〉

当期、丁寧語「です」は、長崎靖子(2012)が、明治初期(明治初期の小新聞, 大新聞, 洋学書の調査)では、現代語のような公的な場面での一般的な丁寧語としての地位を確立していなかったこと、明治中期(明治10年代後半から20年代前半の演説速記の調査)では、新東京人<sup>(7)</sup>には自由に用いられ、東京人には使用が避けられていたことを明らかにしている。本調査における「お～です」の使用者は、明治10年代までの資料では、『沢村田之助曙草紙』〈M13〉の例(前掲例24)や『浅尾よし江の履歴』〈M15〉が早い例として見られた。次の例28の話し手お浪は、官員岩切の母親であり、維新前までは豪家であった大庄屋の妻である。

(例28) 夫に付ても<sup>それ</sup>お前<sup>つい</sup>の身の上<sup>まへ</sup>遠い<sup>み</sup>浪花<sup>うへとほ</sup>を<sup>なには</sup>〈中略〉此程<sup>このほど</sup>途中で<sup>とちう</sup>お咄<sup>はな</sup>して<sup>はな</sup>したが<sup>まへ</sup>お前<sup>むすめ</sup>のやうな<sup>もつ</sup>娘<sup>もつ</sup>を持た<sup>もつ</sup>親公<sup>おやご</sup>は<sup>さぞ</sup>嘸<sup>うれ</sup>やお喜<sup>うれ</sup>しからふ。(中流女性お浪→芸妓若鹿) 【B】 [『浅』305] 〈M15〉

明治10年代までの資料では、他に『怪談牡丹灯籠』〈M17〉、『当世書生気質』〈M18〉、『鹽原多助一代記』〈M18〉、『雪中梅』〈M19〉、『妹と背かゞみ』〈M19〉の例が見られ、使用者は新東京人に偏っている。そして、明治20年代までの資料では、用例数が急増することはないが、『緑蓑談』〈M20〉以降、『五大堂』〈M29〉まで用例が見られる。次の例29は明治21年の例である。

(例29) ぢや<sup>お貴</sup>娘も<sup>お</sup>御待<sup>ご</sup>でしたの。おや左様、まア、これは失礼。(中流女性東令娘→中流女性越谷)

令嬢)【B】[『この子』第五334]〈M21〉

このように社交界の場でも用いられていることからB以上で用いる表現として認識されるようになっていくことがわかる。

#### 4.3.2 「お〜だ」

次に「お〜だ」について、表で分けて示したように語形による違いにも留意しながら見ていく。

##### ○ A〈下→上〉の関係における「お〜だ」の使用

まず、Aの使用から見ていこう。各階層に共通しているのは「お〜なら」である。この表す敬意が広いことは江戸後期から見られる傾向でもある。次の例30は、下女のお聞からお聞の主人の情人島に対して「お〜なら」を用いた例である。ただし、例31のように「お〜だ」も用いている。

(例30) ドレお泊りなら其積りで思入れ御馳走を致しませう。(下層・下女のお聞→中流男性島)【A】  
[『雨』第三回189]〈M9〉

(例31) 夫でも久しぶりにお在なすつて直にお帰りだとネエお前さんも急度お泊んなさるが宜く根メをお極なさらないと旦那は油断がなりません。(下層・下女お聞→中流男性島)【A】[『雨』第三回64]〈M9〉

また、【表2, 3, 4】から、芸妓の使用への偏りが指摘できる。そして芸妓の使用は、語形に偏りが見られない。資料の性格も関係するが、明治20年代以降には、芸妓の使用しか見られなくなる。

##### ○ B〈対等〉の関係における「お〜だ」の使用

次にBの使用について見ていく。江戸後期では、各語形が用いられ、親しい間柄で用いる例とそれ以外の例も見られ広い範囲で用いられることがわかっている。明治期も同様、各語形が現われているが、以下の例のように親しい間柄で用いられている。以下の例32, 33を見てみよう。

(例32) 何故其の様に考へ込んでお出でかネ。(中流男性・伯父の藤兵衛→中流女性・姪のお春)【B】  
[『雪』下篇第四回131]〈M19〉

(例33) ホンニ肥つてお在だから只でさへ股が擦てお困りだのに此間から無理な道を歩行たので踏出した脚気がだん〜悪いのだヨまア吾儕の肩へしつかり捕つてお出な。(中流女性・妻のお増→中流男性・夫の吉三郎)【B】[『雨』第四回30]〈M9〉

例32は中流男性藤兵衛から姪のお春に対して、例33は妻から夫に対して用いた例である。前述(4.1.2)したように、明治10年代後半以降、中流以上の人々がBで用いる表現は「お〜なさる」が大勢を占めており、「〜なさる」や「お〜です」「お〜になる」も用いるようになっていく。これに伴って「お〜だ」の使用は「ウチのことば<sup>(8)</sup>」に縮小していくと考えられる。ただし、「お〜だら」については、次の例のように「ウチのことば」とは言い切れない男性同士の例が見られる。

(例34) 君は別して二人に懇意だから、定めて事情をお聞きだらふ。(中流男性河田→中流男性藤井)【B】[『雪』上篇第一回128]〈M19〉

なお、芸妓の使用には、「お〜だつ(た)<sup>(9)</sup>」の早い例が見られるが、これもまた親しい間柄の女性による、くだけた場面での例であり、「ウチのことば」といえるだろう。

(例35) おひきさんお<sup>まへ</sup>前もうしはたべないなんぞとこのあひだ氷月でおい、だツたがうそかだまかしだネ。(芸妓おころ→芸妓おひき) 【B】 [『安』三編下162] 〈M4〉

例35は、芸妓のおころからおひきに対して「お～だっ(た)」を用いた例である。牛鍋を食べながら世間話をしている、くだけた場面の例である。

#### ○ C〈上→下〉の関係における「お～だ」の使用

最後にCの使用についてである。中流以上の人々と下層の人々の使用が見られるが、そのほとんどが女性の使用であり、語形は「お～か」「お～だ」「お～だら」に偏っている。その例は例36のように母親から娘や息子に対して用いる例や例37のように主人から従者に対して用いる例である。

(例36) 坊は覚えてお<sup>いで</sup>在だらう教えてちょうだいな。(中流女性・母親のお岩→息子徳太郎) 【C】 [『雨』第十六回348] 〈M9〉

(例37) 悲しさうに見えたがどうかお<sup>し</sup>か。(女主人お組→下女阿園) 【C】 [『細』5] 〈M22〉

従って、「お～だ」は丁寧語「です」の発達によって「お～です」と交替するというよりも、江戸後期に用いられた「お～だ」よりもさらに「ウチのことば」となっているのである。そして江戸後期に「お～だ」を用いたり、「お～だ」と「お～なさる」を併用したりした人間関係では、主として「お～なさる」を用いるようになってきている。そのため、「ウチのことば」の使用範囲が広い下層の人々の使用や中流以上の人々の親から子に対して、芸妓から情人に対して用いる例に偏るのである。

## 5. まとめ

以上、明治20年代までにおける3尊敬表現形式について考察を行ってきた。以下、まとめる。

- ・「お～なさる」は、江戸後期からの勢力を保ちつつ、明治20年代まで多用されている。各階層に共通してB以上で用いる一般的な尊敬表現形式の一つであるといえる。(4.1)
- ・「～なさる」は、明治10年代までは、江戸後期の特徴を引き継ぎ、中流男性の使用に偏り、軽い敬意を表す。しかし、明治20年代まででは、高い敬意を表す例も見られるようになる。これは現代語の「～なさる」へとつながっていくと考えられる。江戸後期以来の軽い敬意を表す例も中流以上の人々のCの使用や下層の人々のBの使用に引き続き見られる。(4.2)
- ・「お～です」は、明治期を通して主としてB以上で使用されている。しかし、用例数はまだ少なく、「お～なさる」を用いる方が多い。明治10年代後半から20年代に丁寧語「です」が新東京人によって自由に用いられる(長崎(2012))が、「お～です」がB以上で用いられる尊敬表現形式として使われるようになるのもこの時期以降である。(4.3.1)
- ・「お～だ」は、明治20年代後半以降、使用範囲の縮小傾向が見られる。明治4年の『安愚楽鍋』に「お～だっ(た)」という語形も用いられ発達するが、表す敬意は主としてB以下となり、その使用者も限られるようになる。(4.3.2)

本稿は、明治期における「お～なさる」「～なさる」「お～だ」の使用実態について、上下関係、階層ごとの用例数を示した体系表を作成し、全体的な傾向を捉えた上で具体的な用例についての考察を

行ってきた。これによって従來說明されてきた内容を補うことができたのではないと思われる。しかし、命令形や第三者用法についても考察していく必要があるだろう。今後の課題としたい。

- 注(1) ただし、「だっけ」「だって」の例は江戸後期の人情本にも見られている。この例から今まで「お〜だ」によって過去を表していたが「お〜だった」で過去を表すようになってきていることがわかる。
- (2) 用例は、(話し手→聞き手)【上下関係】[『資料名』巻頁]〈刊行年〉と示し、表す敬意について判断する際に留意した箇所には点線を、「ます」を伴った尊敬語や「くださる」には波線を付す。
- (3) 進藤咲子(1981)は、明治20年ごろまでの口頭語における漢語サ変動詞について考察したものであるが、江戸語に比べてその使用が増加していることを指摘している。ただし、明治20年ごろまでの資料の中でも資料により漢語サ変動詞の使用に差があることも詳しく調査している。
- (4) 10年代までと20年代までという区分は、松村明(1957・1998)が「東京における都市としての発展・変貌の様相と言語的事実の推移との関連上から」分けたものを辻村(1992)が敬語史の立場から修正を加えた「第一期 形成期(明治の初年から明治十年代の終りまで。明治前期)」と「第二期 成立期(明治二、三十年代。明治後期)」を参考にしている。
- (5) 【表2】中流以上の人々の使用ではAでも多用しているが、文中で用いられる例に偏っており、「お〜なさいます」とは表す敬意が異なっているため、Bの使用が中心となる。
- (6) 山田里奈(印刷中a)では「お〜になる」についてまとめている。
- (7) 新東京人とは、江戸(東京)出身者を東京人としたときの地方出身者のことである。
- (8) 長崎(2012)は、「江戸共通語を使って話す会話を「ソト」の会話とし、それに対し自分の「持ち前の言葉」を使って話す会話を「ウチ」の会話とすると、階層によって、「ウチ」と「ソト」の幅は異なる。上層町人の「ウチ」は、身内やかなり親しい間柄という狭い範囲であり、下層へ向かうに従い、「ウチ」の範囲が広がる。(P.34)」と述べている。
- (9) 注1参照。

#### ○参考文献

- ・菊地康人(1994)『敬語』角川書店
- ・小島俊夫(1974)『後期江戸ことばの敬語体系』笠間書院
- ・小松寿雄(1971)「第5章 近代の敬語Ⅱ」『講座国語史 敬語史』大修館書店
- ・小松寿雄(2005)「江戸東京語の敬語形式オ〜ダ」『国語語彙史の研究』24, 和泉書院
- ・小松英雄(1999)『日本語はなぜ変化するか—母語としての日本語の歴史』笠間書院
- ・進藤咲子(1981)『明治時代語の研究—語彙と文章—』明治書院
- ・辻村敏樹(1951)「『お……になる』考」『国文学研究』復刊4〔『敬語の史的研究』東京堂, 1968所収〕
- ・辻村敏樹(1968)『敬語の史的研究』東京堂
- ・辻村敏樹(1992)『敬語論考』明治書院
- ・土屋信一(2009)『江戸・東京語研究—共通語への道』勉誠出版
- ・長崎靖子(2012)『断定表現の通時的研究—江戸語から東京語へ—』武蔵野書院
- ・原口裕(1974)「『お〜になる』考」続紹『国語学』96
- ・松村明(1957・1998)『江戸語東京語の研究』東京堂
- ・山崎久之(1966)「江戸庶民語の待遇表現の体系(1) —三馬の作品を中心として—」『群馬大学教育学部紀要』16〔『続国語待遇表現体系の研究』1990所収〕
- ・山田巖(1959)「明治初期の文献にあらわれた尊敬表現『お(ご)……になる』について」『ことばの研究』1, 国立国語研究所
- ・山田里奈(2012)「『いらっしゃる』系拡大の様相—江戸後期から明治20年代まで—」『早稲田日本語研究』21

- 山田里奈（印刷中a）「尊敬表現形式「お（ご）～になる」系の使用—江戸末期から明治20年代まで—」『近代語論集』17（2014年刊行予定）
- 山田里奈（印刷中b）「江戸後期における尊敬表現形式—「お～なさる」「～なさる」「お～だ」を中心に—」
- 湯沢幸吉郎（1954, 1957）『江戸言葉の研究』明治書院

#### ○調査資料

##### 【明治10年代まで】

『萬国航海西洋道中膝栗毛』（假名垣魯文, 1870〈明3〉）, 『牛店雑談安愚楽鍋』（假名垣魯文, 1871〈明4〉）, 『胡瓜遣』（假名垣魯文, 1872〈明5〉）, 『蝸入道』（假名垣魯文, 1872〈明5〉）—『明治文學全集』（以下、『明治』）／『青楼半可通』（服部応賀, 1874〈明7〉）, 『怪化百物語』（高島藍泉, 1875〈明8〉）—『新日本古典文学大系明治編』（以下、『明治編』）／『春雨文庫』（松村春輔, 1876〈明9〉）, 『金之助の説話』（無署名（『東京繪入新聞』）, 1878〈明11〉）, 『巷説兎手柏』（高島藍泉, 1879〈明12〉）, 『嶋田一郎梅雨日記』（岡本起泉, 1879〈明12〉）—『明治』／『沢村田之助曙草紙』（岡本起泉, 1880〈明13〉）—『明治編』／『浅尾よし江の履歴』（無署名（『東京繪入新聞』）, 1882〈明15〉）—『明治編』, 『怪談牡丹灯笼』（三遊亭円朝, 1884〈明17〉）, 『鹽原太助一代記』（三遊亭円朝, 1885〈明18〉）—『円朝全集』, 『一読三歎当世書生氣質』（坪内逍遙, 1885〈明18〉）, 『新磨妹と背かゞみ』（坪内逍遙, 1886〈明19〉）—『明治』／『政治小説雪中梅』（末広鉄腸, 1886〈明19〉）—『明治編』

##### 【明治20年代まで】

『浮雲』（二葉亭四迷, 1887〈明20〉）—『明治』／『ふくさつゞみ』『風琴調一節』（山田美妙, 1887〈明20〉—『山田美妙集』2012（以下、『山田』））／『處世寫真緑蓑談』（前編／続編）（須藤南翠, 1888〈明21〉）—『明治』／『空行く月』（山田美妙, 1888〈明21〉）, 『この子』（山田美妙, 1889〈明22〉）—『山田』／『細君』（坪内逍遙, 1889〈明22〉）—『明治』／『二人女房』（尾崎紅葉, 1891〈明24〉）—『明治』／『黒蜥蜴』（広津柳浪, 1895〈明28〉）, 『浅瀬の波』（広津柳浪, 1895〈明28〉）, 『五大堂』（田沢稲舟, 1896〈明29〉）—『明治編』／『多情多恨』（尾崎紅葉, 1896〈明29〉）—『紅葉全集』